

大垣駅南口井戸舟整備による 水都大垣再生の取組 ～地域固有文化を活かした魅力向上～

平野 貴大

元 大垣市 都市計画部 市街地整備課 (〒503-8601 岐阜県大垣市丸の内2丁目29)

現 大垣市 総務部 契約管財課 (〒503-8601 岐阜県大垣市丸の内2丁目29)

大垣市は豊富な地下水を誇る「水の都」として知られるが、都市化や上下水道整備の進展により、日常的に湧水と触れ合う機会が減少している。この課題に対し、本市は2023年度から3ヶ年事業として「水都大垣再生プロジェクト」を始動。その中核として、大垣駅南口に伝統的な二槽式井戸舟を含む2基の井戸舟を整備し、湧水文化を日常空間に再現した。整備後は、地域学習の場としても活用されるなど、水都の魅力を発信するランドマークとして機能している。

キーワード 水都大垣, 井戸舟, 水と触れる

1. はじめに

(1) 大垣市の特色

本市は、岐阜県南西部に位置し、東に養老山地、北に伊吹山地を望む濃尾平野の西端に立地する(図-1)。地理的には東海道と中山道を結ぶ要衝にあり、古くから陸上交通の中継地として発展してきた。また、木曽川水系の複数の河川が流れることから水運も発達し、内陸の港町として繁栄した。近代以降は、JR東海道本線・養老鉄道・樽見鉄道が交差する鉄道結節点として、また名神高速道路や国道21号などの幹線道路が市内を通過する広域交通の要衝として、岐阜県西部の中心的役割を担ってきた。

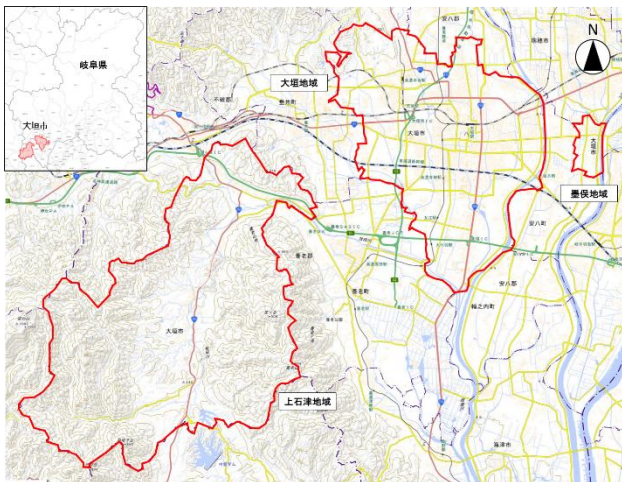


図-1 大垣市の位置

また、本市が位置する濃尾平野は、厚い砂礫層によって構成されており、天然の水瓶として機能し、市域の地下には良質で豊富な地下水が蓄えられている。そのため、市内各所で自噴水が見られることから、古くから「水の都」と呼ばれ、湧水は市民の生活や産業と密接に結びついてきた(図-2)。この豊かな水資源は、古くから農業用水や生活用水として活用されるとともに、近代以降は繊維・食品・化学などの製造業の発展を支える基盤ともなった。さらに、水門川をはじめとする複数の河川・水路が市街地に張り巡らされており、水辺の景観が都市の風情を形成してきた。こうした地理的条件と豊富な水資源を背景に、「水都大垣」としての都市アイデンティティを今日に至るまで継承している。



図-2 湧水マップ

2. 課題

本市は豊富な湧水に恵まれ、古くから「水都」と称されてきた。しかし近年、上水道整備に伴う井戸の減少や中心市街地の開発が進むにつれ、市民が日常的に湧水と触れ合う機会は失われつつある。その結果、「水都大垣」を実感できる場面は年々減少し、特に若い世代においては、大垣がかつて水と深く結びついた都市であったことを体感することが困難になっている。

こうした状況を踏まえ、「水都大垣」が持つ歴史的・文化的価値の風化を重要な課題として認識している。

3. 水都大垣再生プロジェクトとは

本市では2023年度より3ヶ年事業として「水都大垣再生プロジェクト」を開始した。本プロジェクトは、市民が水を見たり触れたりする機会を拡充し、「水都を感じられる風景」を創出することで、大垣の象徴である「水（湧水）」を、まちの魅力向上のために活用することを目的とした取り組みである。

プロジェクトの推進にあたっては、「水都を感じるまちづくり」「水都を楽しむにぎわいづくり」「水都を生かすものづくり」「水都を引き継ぐ歴史づくり」の4つの施策体系に事業を整理・分類した。これら4つの施策が連携し相乗効果を生み出すことで、プロジェクト全体の波及効果をさらに高めることを目指している。なお、「水都を感じるまちづくり」はハード事業として、「水都を楽しむにぎわいづくり」、「水都を生かすものづくり」、「水都を引き継ぐ歴史づくり」の3施策はソフト事業として推進した。

「水都を感じるまちづくり」は、日常生活の中に「水のある風景」を可視的な形で創出することを目的とするハード事業である。後述する「まちなかの井戸舟整備」のほか、市内を流れる水門川沿いにおいて、四季の変化を感じながら散策できる遊歩道の整備等を実施している（図-3）。



図-3 ミニ奥の細道周遊マップ

「水都を楽しむにぎわいづくり」は、湧水や川辺といった水辺環境を積極的に楽しんでもらうためのソフト事業である。水門川の舟下りや水辺空間を活用した滞在型のイベント「かわまちテラス」を開催し好評を得ている（図-4）。



図-4 かわまちテラス

また、国土交通省が推奨する水辺で乾杯（図-5）やブルーライトアップ（図-6）についても、水都大垣再生プロジェクトの一環として取り組み、合わせて全国に向けた発信に活用している。



図-5 水辺で乾杯

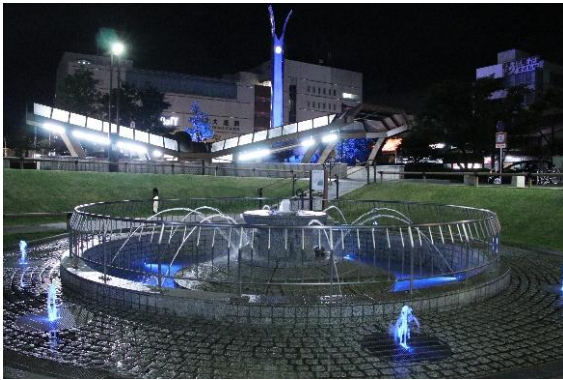


図-6 ブルーライトアップ

「水都を生かすものづくり」は、豊富な地下水を産業資源として企業誘致に生かすとともに、地下水を活用した、特産品（水まんじゅう、大垣の水、地酒）や農産物等の開発・PRを行うソフト事業である。

「水都を引き継ぐ歴史づくり」は、先人たちが培ってきた「水」を文化資源と捉え、積極的に情報発信するとともに、次世代に引き継ぐソフト事業であり、小中学校における水都大垣の学習や、生涯学習である「水都大垣塾」を設けている。

4. 豊富な地下水を活用した井戸舟整備

水都大垣再生プロジェクトの「水都を感じるまちづくり」として、大垣駅南口に井戸舟を2基整備し、市民はもとより市外から訪れる人も「水都大垣」を感じられる景観づくりを進めた。

(1) 井戸舟とは

本市では、豊富な地下水が自噴するという恵まれた自然条件のもと、かつて多くの家庭に「井戸舟」が備えられていた。井戸舟とは、井戸から湧き出る水を受け、日常的な家事作業を行うために設けられた木製や石製の槽のことであり、暮らしにおいては欠かすことのできない生活設備であった。

¹⁾なかでも家庭に広く普及していたのが「二槽式の井戸舟」である。これは、仕切りによって二つの槽に分けられた構造を持ち、一方の槽では食材や食器を洗い、もう一方の槽では澄んだ水をすすぎや飲料用として確保するなど、用途に応じて使い分ける工夫が凝らされていた。

常に新鮮な自噴水が流れ込む仕組みとなっていたため、水は常時、清潔な状態に保たれ、衛生面においても優れた機能を果たしていた。

井戸舟は単なる水汲みの場にとどまらず、野菜や食器を洗う台所仕事の中心であり、夏には食材や飲み物を冷やす天然の冷蔵庫としても活用された。地下水は一年を通じて水温が安定しており、夏は冷たく冬は温かいという特性が日々の暮らしの中で大いに重宝された。井戸端は家族が集まり言葉を交わす場でもあり、近隣との交流の場としても機能していた（図-7）。

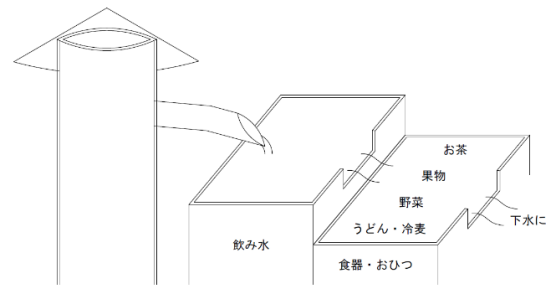


図-7 井戸舟図

上水道の整備が進んだ現代においては、こうした井戸舟のある風景はほとんど見られなくなったが、生活文化に深く刻まれた水の記憶を呼びもどすきっかけとして、多くの人が行き交う大垣駅前での井戸舟整備を計画した。

(2) 水源のさく井工

本市が管理している大垣駅南口広場内に、井戸舟のための水源となる井戸をさく井した（図-8）。深さ150m、直径150mm、水温15.0℃、硬度51mg/Lの水源が誕生した。



図-8 さく井箇所エアレーション状況

(3) まちなかの井戸舟整備

整備した2基の井戸舟は、1基目は古くから家庭にある2槽式の井戸舟、2基目は地下水が絶えず湧き出る井戸舟である。整備にあたっては、市民から愛着を持って長く親しまれるよう、愛称の一般募集を実施した。寄せられた875点の候補について、選考委員による一次審査を行い、選出された候補を対象に市民投票による二次審査を経て、愛称を決定した。

1基目の「水都大垣 出会いの泉」には、訪問者と大垣との最初の「出会い」の場となり、多くの人を大垣へ呼び込むランドマークとなることへの願いが、2基目の「水都大垣 集いの泉」には、井戸舟の周囲に人々が「集い」、子どもたちが訪れ、誰もが大垣の湧水を楽しむことで新たな賑わいが生まれることへの願いが、込められている（図-9）（図-10）（図-11）。

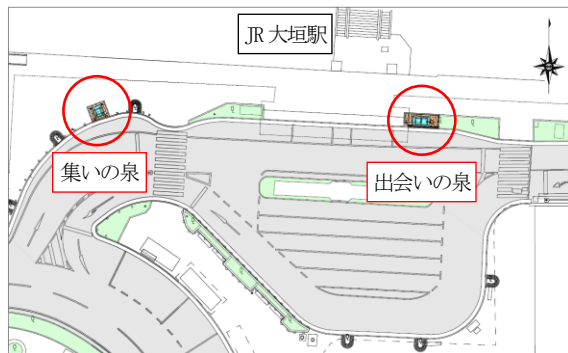


図-9 井戸舟位置図



図-10 「水都大垣 出会うの泉」の式典



図-11 「水都大垣 集いの泉」の式典

井戸舟本体には、古くから広く用いられてきた御影石を使用しており、本磨き仕上げを施すことで光沢のある表面とし、水に濡れることでさらに色が深まり、美しが増す仕上がりとなっている。一方、井戸舟周辺をパーカー仕上げにすることで、表面に適度な粗さをもたせ、湧水に触れに来た人が滑りにくい安全な仕上げとした。

(4) 災害時の緊急給水

今回整備した井戸は、災害時に水道が断水した場合を想定し、井戸から生活用水を供給できるよう整備を行い、災害時協力井戸に登録した。災害時の給水場所を大垣駅南口広場内に設置することにより、多くの方が水を求めに来た場合でも対応可能とした（図-12）。



図-12 井戸に緊急用給水装置を接続

5. 効果

井戸舟整備後に、集客状況の調査を行った。2基の井戸舟周辺で立ち止まった人は、平日で約700人/日、土日で約1,100人/日であり、JR大垣駅の1日当たり平均乗車数（約16,000人）の約6%であった。また、駅周辺のイベント開催時には、約2,600人/日が立ち止まっていたことから、多くの人に「水都大垣」を感じていただいていると考えられる。

夏場には、井戸舟を訪れる人が湧水に触れ、水筒やペットボトルに入れて持って帰られるなど、湧水の冷たさと涼しさを感じてもらえる場所となっている（図-13）。



図-13 水に触れ合う子ども

市内の小学校で実施されている「ふるさと大垣科」の授業では、「水都大垣」について学ぶ機会を設けており、実際に井戸舟を訪れ学習する学校があり、「水都を引き継ぐ歴史づくり」として、活用されている。

6. 今後の取り組み

現在、大垣駅南口に整備した2基の井戸舟により、大垣の玄関口で湧水を体感できるスポットが生まれ、足を止めて湧水を楽しむ市民や来訪者が増加している。2025年度には、まちなかへの回遊を促進するため、同駅南口にデジタルサイネージを設置し、市の観光情報や湧水スポットの紹介を行っている。

今後は、まちなかの案内サインの再整備も進め、大垣市の魅力を発見・探求しながらまちを巡ることができる環境の充実を図る。

7. おわりに

本稿で紹介した井戸舟整備に加え、2023年度から推進している「水都大垣再生プロジェクト」によって、水辺空間を創出する新たな施設や、水辺空間のにぎわいも生まれつつある。さらに、市民提案に基づく事業の実施など、市民が水都大垣を意識し、自らまちを盛り上げる機運が醸成されている。

2026年度からは、「水都大垣再生プロジェクト2.0 ～

水めぐる大垣～」として、これまでの成果を活かしながら、大垣固有の地域資源である「水」を軸に、人・地域・誇りが循環し発展するまちの実現に向けて、官民が連携して各種事業を推進していく。

日常生活の中で自然に水都を感じ、一人ひとりの心に「湧水のまち・水都大垣」が根付くことを目指したい。

謝辞：本論文を作成するにあたり、多くの方々にご支援いただきました。

この場をお借りして御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 大垣市史 民族・輪中